卓越大学院プログラム現地視察報告書（令和5年度）

卓越大学院プログラム委員会

機　　関　　名	東京工業大学	整 理 番 号	１９０６
プログラム名称	最先端量子科学に基づく超スマート社会エンジニアリング教育プログラム		
プログラム責任者	井上 光太郎	プログラムコーディネーター	阪口 啓

１．進捗状況概要

・コロナによる制約が解け対面でのプログラムが可能となったこと、さらに関係している先生方の多大なるご尽力により、研究と社会実装の連携基盤となるコンソーシアムへの参加団体が 60 件に増えるとともに、今年のマッチングワークショップにおいては 21 件という過去最大のマッチングを実現するなど予想を上回る実績を出している。また、学内外資源獲得額においても、毎年着実に増えており、令和 4 年度は目標値を超える金額を得ている。学生の国際競争力の証としての国際誌における論文発表数においては、36 件と予定を 6 件上回っている。昨年度の国際会議における発表数はコロナの影響で目標の半分強となっているが、今後の拡大が見込まれる。さらに、参加学生のコースに対する満足度も高く、ヒヤリングした全員がプログラムの趣旨を理解して自らが実践しており、「他の学生にこのプログラムを薦めたい」と考えている。

【大学院教育全体の改革への取組状況】

・当学には、3 重点分野に対応する 3 卓越大学院プログラムが存在しており、それぞれコンソーシアム等の外部機関との連携を活用した博士人材育成並びに社会連携が進められており、本事業の特徴として高い実績を上げている。博士課程に進学する学生に対して、いずれかの修博一貫教育プログラムに登録するように、協力してブランド化を行い、合同で学生対象の説明会を実施するなどをしている。さらに、東京医科歯科大学との統合も予定されており、今後のプランとして、３つの卓越大学院の成果をもとに、大学院全体に対する波及効果を出すための方策などの検討をしている。しかし、本事業関係の学生数は大学院全体の学生数に対して限られている。卓越大学院の補助期間終了までにさらなる検討がなされ、大学院教育全体への改革プラン（量的にも）が具体的になることを期待する。

２．意見（改善を要する点、実施した助言等）

・日本人の学生が少ないことに関しては、28%（令和 4 年）、30%（令和 5 年 3 月）、32%（令和 5 年 5 月）と微増はしているが、まだ少ない状況にある。よりわかりやすいホームページにするための修正や学生の保護者へのアプローチ、博士課程学生による学部生へのキャラバンなどさまざまな工夫がなされている。来年度以降の日本人の学生の増加に期待をしている。

・外国籍のアグレッシブな博士課程の学生が多くいる環境にいるので、グローバルアドバイザー制度等とのシナジーも活用し、日本人の博士課程の学生の視野を広げるなどもありえるのではないかと考える。一般的に内向き志向の学生が多い傾向にあるが、グローバルでの活躍など将来の可能性について広げるためにさらなる刺激を提供することもありえるのではないかと思われる。例えば、博士に対して特別の処遇を与えている海外企業等への就職を念頭にしたインターンシップやグローバルコミュニケーション育成など。

（・日本人の学生の博士課程進学を増加させるという課題は、当プログラムのみならず、日本全体の問題ではあるが、本事業では、他大学に先駆けこれを打開する多様なトライアルを行うことを期待する。さらに、卓越大学院のブランド化など検討する必要がある。）